

毛布伝来！ ヨーロッパから日本へ

江戸時代におこなわれていた鎖国が終わり、大阪は1868（明治元）年に開市・開港（諸外国と貿易できるように市場や港を開くこと）され、現在の大阪市川口に外国人居留地がつけられました。



川口居留地を描いた錦絵（桃山学院史料室所蔵）

文明開化の流れの中で「毛布」が輸入され、一般に赤色の毛布（赤ゲット）が流行します。この赤ゲットの流行を受けて、1886（明治19）年頃から泉大津で毛布の生産が始まります。



赤ゲット

泉大津は江戸時代から綿花栽培が盛んで、縮木綿や真田紐を製織していました。そのため、機織りができる人材や織機が揃っており、毛布産業に参入しやすい素地があったようです。輸入品の毛布は羊毛製でしたが、当時の日本では羊毛は入手困難な原料であったため、安価で入手しやすい牛毛を用いて織られました。

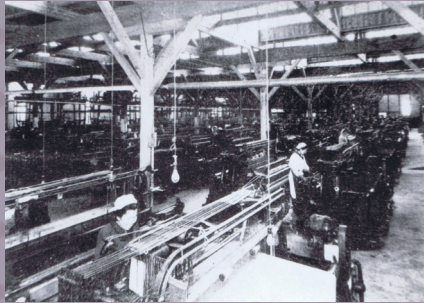
技術革新 織り技術の発展

模様のある毛布を織りたいと、1889（明治22）年に小川平助と前山重治郎が京都今出川通の倉田留吉から2機のジャカード機を購入しました。これにより、複雑な模様を織りだすことができるようになりました。



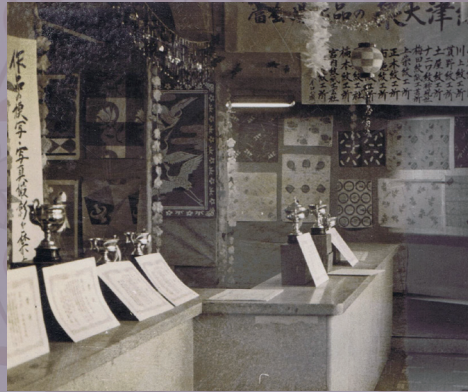
1950年頃の織毛布
ジャカード織機により、複雑な文様が織り出されるようになった

産業と芸術



1951（昭和26）年の統計調査によると、泉大津市内に451軒の織物工場があり、生産額は112億円に達しています。愛知県一宮市と並ぶ日本有数の機業都市でした。

1955（昭和30）年頃の毛布工場の様子



1956（昭和31）年からは、市内でデザイナーの腕を競う「紋紙図案競技会」がおこなわれるなど、毛布のデザインについての関心が高まりました。

1956（昭和31）年 紋紙図案競技会

織毛布のデザイン

1960年代はモノを買うことそのものが喜びであり、作れば売れる産業主導型の時代でした。

1970年代になると品質や性能の差異を求めるニーズ主導の時代へと変貌していきます。1980年代には、デザインは「特別なものに施す」ことから変容し、日常的な部分や暮らしの空間に入り込むようになり、消費者は、生活の安定や質の向上によって生まれた新しいライフスタイル確立のために、デザイン性に優れた日常製品を選ぶようになります。

このような時代背景のなか、生活に彩りを加えるだけでなく、文化性や良質なイメージをアピールするようなデザインの毛布が次々に生み出されることとなります。

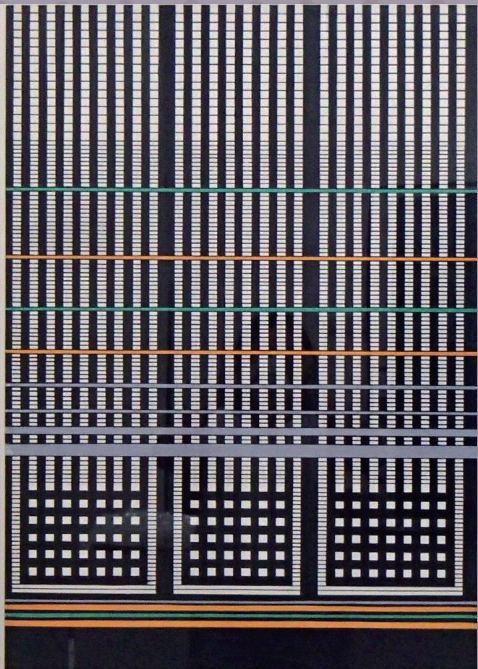
デザインは、各工場に所属するデザイナーがおこないます。工場独自の柄を創り出そう、発注がとれるデザインを描こうと、切磋琢磨しながら日々5枚、10枚と描いていきました。

植物をモチーフにしたデザイン、幾何学模様が多く描かれました。また、総柄の動物のデザインは、輸出用毛布のデザインとして人気がありました。

植物柄のデザイン



幾何学模様のデザイン



動物のデザイン



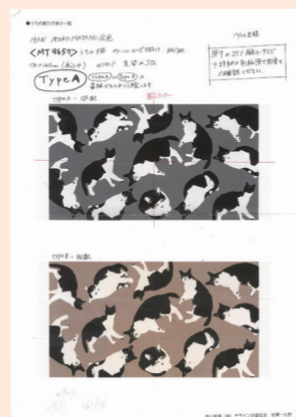
1980年代（昭和末頃）の織毛布のデザイン画

デザインから

製品へ

デザイナーによって描かれたデザインは、職人の手によって、方眼紙の上にドット図に変換され、設計図ができあがります。この設計図を元にパンチカードが作成され、美しいデザインの織毛布が製織されるのです。

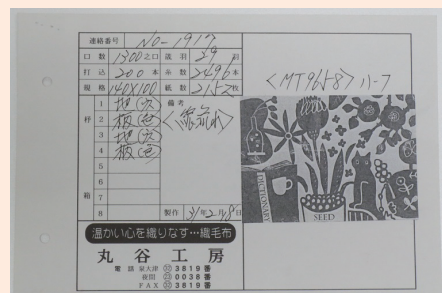
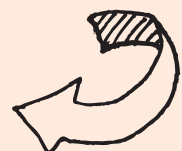
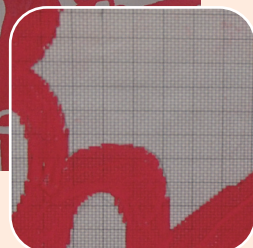
デザイン画を細かい方眼に写し
紋紙の設計図を作成します



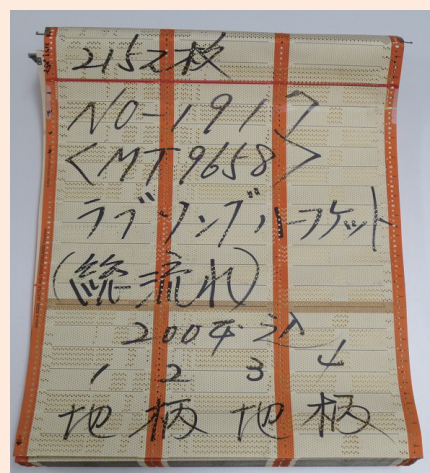
デザイナーの描いた原図と指示書



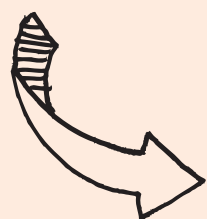
部分拡大→



紋紙をつくるための指示書



設計図を元に紋紙を作製



製品の完成



資料提供 今新毛織株式会社

泉大津市立織編館
ギャラリー

9月17日(木)～10月18日(日)

入館無料
開館時間 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
*水曜休館

桃山学院大学
学院史料展示コーナー

10月23日(金)～11月20日(金)

入場無料
開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
*土・日曜・祝日は閉館

令和2年9月17日
編集 泉大津市立織編館
発行 泉大津市立織編館 桃山学院大学

2020年泉大津市・桃山学院大学連携事業

主催 泉大津市立織編館
協力 桃山学院大学
今新毛織(株)・丸谷工房

織毛布デザイン展

益か心を織りなす...織毛布

ORIAMU

◆新型コロナウイルス感染拡大防止措置にご協力を
お願いいたします